

Ⅲ 国語「天国は、おかあさんの背中」（３組）

1 学習の概要

2013年は新美南吉生誕百年にあたります。雁宿小学校は学区に雁宿公園や半田高校、北谷墓地など南吉ゆかりの地が多くあり、市内でも南吉を身近に感じられる地域の一つで、子どもたちは南吉のことを「南吉さん」と親しみを込めて呼んでいます。しかし、南吉が物語以外に詩や短歌、俳句を作っていたことや、南吉自身の姿はあまり知られていません。そこで、国語の詩の学習の際に、南吉の母への思いがこもった詩「天国」を取り上げ、南吉の詩にふれながら、幼くして実母を亡くした南吉の母に対する特別な思いに気付かせて、南吉をさらに身近に感じられるようにしたいと考え、この学習を計画しました。

2 ねらい

- 「天国」を「わたしと小鳥とすずと」と「みいつけた」の二つの詩と比べながら読み、詩の構成について考える。
- 詩の内容について感想をもち、詩の意味や作者の気持ちを考えて音読することができる。
- 南吉の生い立ちについて知る。

3 取り組み

- (1) 南吉さんの詩「天国」について考える

- ① 「天国」という言葉から想像するものを考える

「天国」はどこにあるか、どんなところかと問い、一般的な天国のイメージと南吉さんの考えた「天国」の違いを際立たせるようにしました。

「南吉作『天国』の詩」

天国	おかあさんたちは みんな一つの、天国をもっています。	新美 南吉
	どのおかあさんも どのおかあさんももっています。	
	それはやさしい背中です。	
	どのおかあさんの背中でも 赤ちゃんが眠ったことがありました。	
	背中はおちこちゆれました。	
	子どもたちは おかあさんの背中を ほんとの天国だとおもっていました。	
	おかあさんたちは みんな一つの、天国をもっています。	

子どもたちのイメージ

- ・ 空 ・ 花畑 ・ 雲
- ・ いい人が行く
- ・ 楽しい ・ 助け合う

天 国

南吉さん

- ・ お母さんの背中

- ② 「天国」を音読する

いろいろな読み方で何回も詩を読み、詩のリズムや詩のもつ優しくあたたかい雰囲気をつかみました。

- ③ 詩の構成について考える

すでに学習してきた二つの詩「わたしと小鳥とすずと」と「みいつけた」と比べて、似ているところや違うところを見つけました。



「詩の一斉読み」

④ 南吉さんの考えた「天国」は、どんなところか考える

詩の中で使われている言葉や自分がおぶわれた経験から、お母さんの背中
中は、あたたかくて気持ちのよい幸せなところであることを感じ取り、幸
せな気持ちに浸りました。

(2) 南吉さんの生い立ちを知る

4歳で実母を病気で亡くし、6歳で継母に弟が生まれ、母に甘えられずに
寂しかったであろう南吉さんの幼きころの話をしました。子どもたちはどの
子も皆真剣に聞いていました。

(3) 南吉さんの気持ちになって音読する

- ① どんな気持ちで詩を読むとよいか考える
優しくてあたたかかった母の背中におぶ
われたときの記憶や母への思い、21歳で
この詩を書いた南吉さんの気持ちが、その
生い立ちを知ることによって少し分かってきまし
た。そこで、どんな気持ちでこの詩を読む
とよいか考え、ワークシートに書きました。

② 「天国」を音読する

「南吉さんは、お母さんにおんぶし
てもらいたいなという気持ちで、この
詩を書いたと思います。だから、わた
しも、お母さんにおんぶしてもらいた
いという気持ちで読みます」という
ように、どんな気持ちで読むか発表し
てから音読しました。

(4) 南吉さんの「天国」を体験する

家庭学習の課題を「天国」の音読と家
の方におんぶしていただくことにしまし
た。その感想を日記に書いてきた子が何
人かいました。保護者の皆様のご協力に感謝いたします。

—— 子どもの感想 ——

今日、お母さんにおんぶをしてもらいました。南吉さんの詩のように、
やさしくてあたたかくて、せ中が天国のように思いました。そして、小さ
いころのことを思い出しました。

「ワークシート」

「天国」を南吉さんの気持ちになって音読しよう。
名前 ()
南吉さんは、お母さんのおんぶに、やさしく、
お母さんに、おんぶを、
という気持ちで、「天国」の詩を書いたと思います。
だから、わたしも、南吉さんみたいに、お母さん
に、会いたいです。
という気持ちで読みます。



「詩の音読発表」

4 成果と課題

南吉が詩を作っていることを知り驚く子がたくさんいました。この学習で南
吉が作った詩を取り上げ、その内容に関連させて南吉の生い立ちを知らせたこ
とで、子どもたちは南吉作品の世界を広げ、南吉という人物にも目を向けるこ
とができました。そして、南吉を今まで以上に身近に感じられるようになった
のではないのでしょうか。

新美南吉生誕百年の年に子どもたちは4年生になり、国語で代表作「ごんぎ
つね」を学習します。そのときにより深い読み取りができるように、これから
もいろいろな形で南吉との出会いを進めていきたいと思えます。

